

告白、何年かかる？

スキンみるく

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ひびきちちゃんが五代さんに告白したいだけのお話。

目次

E
P
I
S
O
D
E
I

決意

—

1

E P I S O D E 1 決意

「ヤバい……コレはちよつとシャレにならねえ……!」

風呂上がり徐々に徐々に体重計に乗った紗倉ひびきは、この世の終わりみたいなお表情になつてしまった。

『55.4kg』

今日、友人である彩也香に指摘されたとおり、この1年でずいぶん彼女が肥えてしまった。太つた原因は彩也香曰く「食べ過ぎ」だろう。ほぼ毎日のように彩也香と買い食いし、手当たり次第に物を食らつていたツケがまわつてきたのだ。

「決めた! ダイエットしよう……!」

そう言うひびきの目は決意に満ちていた。このままではダメだと己を奮い立たせ、手始めにカレーパンに齧り付く。

「明日から……」

紗倉ひびき……彼女が理想のモチモチボディを手に入れる日は果たして来るのだろ

うか……

★

歯磨きを済ませ、ベッドに横になった私は考える。ダイエツトする目的はなんなのかと。お気に入りの服を着るため？ 誰もが羨む肉体を得るため？ もちろんどれも間違っちゃいない。でも、きつと一番は……。

「アイツに女の子として見られたいから……だよなあ」

私にはいわゆる幼馴染がいる。そいつとはずーっと一緒だ。うんと小さい頃から……。いつつも笑顔で、世話焼いてくれて、私が落ち込んでたら「ひびきは笑ってたほうが可愛いよ！」なんて言っつてよく励ましてくれる。究極のお人好しだ。たぶん、アイツは私がいくら太ろうと今まで通りに接してくれるんだらう。でも、だからダメなんだ。今まで通りじゃ！ そう、今年こそアイツに私の気持ちを伝えるんだから！

「好きだ！ いや、好きです！ や、もっとこう色っぽく……」

ひびきの告白シミュレーションはその後夜明けギリギリまで行われた……。

★

「雄介！ これ3番テーブルさんな！」

「了解！ ……お待たせしました！ ポレポレ特製サンドイッチとコーヒーです！」

時刻は午後五時。喫茶店ポレポレは帰宅途中の学生で賑わっていた。皇桜女学院の目と鼻の先であるし、価格も『皇桜女学院生ティータム割引』なるサービスがあるため人気となっている。ちなみに、このサービスを考えたのは店主である『おやっさん』だ。そんな店で働く青年、五代雄介。幼くして両親を事故で亡くした彼を引き取り、育ててくれたのがおやっさんである。そんな恩に報いるため、雄介は中学を卒業後すぐさまポレポレで働き始めた。おやっさんからは高校ぐらい卒業しろ！ と反対されたが、どうしても働かせて欲しいと押し切り現在に至る。元来の人懐っこさと笑顔で客からの評判は上々であり、特に皇桜女学院生は雄介目当てに通うものも多い。

「雄介！ おやっさん！ 来たぜー」

「どうもー」

学校帰りのひびきと彩也香が入店してきた。彼女たち、特にひびきは雄介と幼馴染ということもあり、ポレポレとの付き合いは長い。彩也香はひびきの付き合いでこの店を知り、今ではすっかり常連である。

「二人ともお疲れ！　いつものでいい？」

「うん、あたしはいつもので」

「ええつと、私はパフエなしで、サンドイッチを……野菜多めで」

ひびきのオーダーを聞き、雄介は驚愕の表情を浮かべる。

「ええつ!?　ひびき……パフエ食べないって本気？　いつも決まって食べてるのに」

「あ、ああ！　今日はちよつと腹の具合が悪くてよお。は、ハハハ」

「大丈夫？　お薬持ってくるよ」

「いや！　いいってば！　ホントたいしたことねーから！」

ひびきの言葉に、そっか。でも無理しないでね、と労りの言葉をかける雄介。しばらくして注文の品が届いた2人は料理を楽しみつつ、ひそひそと会話を始める。

「なあ、やつぱり五代にはちゃんと打ち明けるべきだって。お前ひとりじゃダイエツトなんて絶対無理」

「わ、分かってるって！　そもそも今日はダイエツト付き合ってくれって言うつもりで来たんだからよ……」

「まったく……。ダイエツト付き合って欲しいって言うだけでこれかー。こりやアツチの付き合ってくださいい夢のまた夢、だな」

「ば、バカヤロー……!!」 雄介に聞こえちまうだろ!」

そんなこんなで三十分ほど経過し、いよいよ意を決して雄介のもとに向かうひびき。告白するわけでもないというのに胸の鼓動が収まらない。

「ゆ、雄介……!! あ、あのよ」

「ひびき、どうしたの? 別の注文?」

「い、いや実は相談があるんだ!」

「ん! いいよ。オレでよかったら力になるから!」

雄介のまぶしい笑顔がひびきを襲う! 彼を一人の男性として意識しはじめてからは、より一層ひびきの弱点になってしまった。茹蛸のように赤くなった顔を隠すようにひびきは遂にその言葉を口にする。

「ダイエツトに付き合ってくれ!!!」

ひびき渾身のお願いはどうやら雄介に届いたようだ。当然である。店内に響き渡るには十分すぎる声量だったのだから。つまり……

『くすくす……』

居合わせた皇桜女学院生にまで自分、太りました宣言をかましてしまった。
(ああああああ!!!)

やってしまった……! ひびきの心はもうズタボロである。思い人である雄介のみに打ち明けるつもりが、自身の通う高校の生徒に知られてしまった……! もしひびきの手にスコップがあれば、店内に穴を掘り隠れたがっていたことだろう。

「うん! いいよ! 一緒にがんばろう、ひびき!」

失神寸前のひびきに投げかけられたのは雄介のその一言。それだけでひびきはたちまち涙を浮かべ、大いに喜んだ。

「ま、マジでいいのかよ! 店のほうは……」

「心配無用! ちょうどバイトの応募が集まってきてね! まったく驚いたよ。募集した途端、もうすごいなのなの」

ひびきの心配を一蹴したのはおやつさんだった。いやーいいね、若いつてのはいい、と一人盛り上がっている。おやつさんの言葉の意味を理解しているひびきは再び顔を

赤らめるが、一方の雄介は気づいていないようである。

「というわけで……店は大丈夫！　ちようどオレも運動不足きみで、何とかしなきゃな！　つて思つてたし！」

「お、おう……！　じゃ、よろしく頼むよ。雄介！」

「うん！　ほら、ひびきアレやろう！　アレ！」

「……アレ？　ああ！　アレか！」

それは、二人が幼いころからやっていたこと。ひびきが落ち込んだときや、二人でまた遊ぶ約束をした後必ずやっていたことだ。

『大丈夫！』

笑顔いっぱい親指をお互いにたてるサムズアップ。かくして、紗倉ひびきのダイエツト計画が始動したのだった。